

私 の 心 に 残 つ た 本



# 進化しすぎた脳

医学部准教授  
(生物学)

角川 裕造

「進化しすぎた脳」  
池谷 裕二 著  
(講談社)

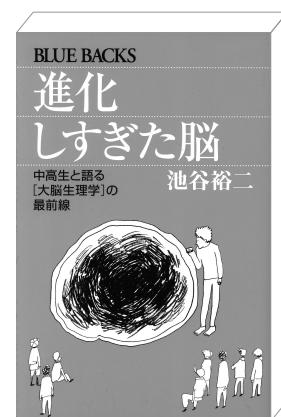
私は夕焼けを眺めるのが大好きです。特に夕日が沈んだ後、茜色から次第に群青色に変化していく空の色を眺めていると、不思議と心が落ち着きます。私の研究室がある生涯教育研修センターの西側の窓からは、はるか鈴鹿の山並みをシルエットに素晴らしい夕焼けを眺めることができます。冬の空気の澄んだ夕暮れ時に、是非一度お越し下さい。小さい頃からずっと疑問に思っていたのは、この私の見ている夕焼けの色は他の人も同じように見えているのだろうか?ということでした。こんな素晴らしい夕焼け空を一瞥もせずに、家路を急いでゆく人たちには、この素晴らしい色彩のグラデーションの映り方が、私とは違っているのではないだろうか、とも考えていました。

今回紹介する本の著者は、まだ30代の若手脳研究者です。書店で見かけた「進化しすぎた脳」というタイトルの本が前から気にはなっていましたが、本のカバーの袖に書かれた著者の略歴を見て、「こんな若造にたいした本が書けるわけがない」という私の傲慢な気持ちが、この本の購入を躊躇させていました。ところが、医学部で講義をすることになり、講義のタネにでもしようかとこの本を読み始めてみると、たちまち彼の世界に引きずり込まれてしまいました。この本は彼がアメリカ留学中に、ニューヨーク在住の日本人高校生に対して行った講義がもとになっています。高校生相手に対話形式で展開する内容は、とても分かりやすいものになっています。彼はこの本の中で、私たちが日常その存在に疑問を抱くこともなく接している、私たちを取り巻いているこの世界が、実は脳の中で作り上げられた世界であることを、最新の論文のデータを元に解き明かしていきます。

やはり私が疑っていたとおり、人それぞれに夕焼け空の色の見え方は違っていたのです。網膜上の色を識別する細胞（錐体細胞）に含まれている光受容素子（オプシンという名のタンパク質）の特性や、その遺伝子に個体差がある以上、同じものを見ても他人と同じ色に見えるはずがありません。色の違いばかりか目で見ているこの現実世界は、脳が作り上げた世界であって、本当は「目ができたから、世界ができた」と彼は言います。"Seeing is believing"と、自分の見たものだけを信じてきた私に

とって、これは衝撃でした。たとえば、>————<と←→のどちらの棒が長く見えますか?という錯覚のテストで、前の方の棒が長く見えるのは、単なる思い込み違いであると私は考えていました。また、盲点の実験で、ふたつ並んだ印の片方が消えてしまうのは、盲点には視細胞がないから単に見えなくなっているだけだと、考えていました。しかし、よく考えてみると、パターンによっては消えてしまうところが真っ白になったり、真っ黒になったりと「見えていない様子」が状況によって異なります。これは実は脳が盲点の周辺の映像から判断して、つじつまが合うような映像を盲点に当たる場所に勝手に貼り付けていたためだったのです。確かに思い当たることはあります。妻が妊娠したときに私は初めて、街の中にはこんなにたくさんの妊婦が歩いているんだ、ということに気づき、驚いたことがあります。それまで私は街の中で妊婦の存在に全く気がついていなかったのです。妻の妊娠という経験がなければ、私の網膜に映った妊婦の映像は、私の脳の中で完全に抹消されていたのです。また最近、親の介護を始めるようになると、車椅子の障害になる段差が街の中にたくさん見え始めました。

この他にも記憶のメカニズムから意識の問題に至るまで、大脳生理学の最先端の知識を駆使しつつ、池谷ワールドが展開します。若い著者だからこそできる歯切れの良い切り口と、若いくせに豊富な知識に裏付けされた巧みな文章で、読者を飽きさせることなく、一気に読ませてくれます。文才豊かな著者は、この他にも多くの著作を上梓しています。もっと脳のことを知りたい方は、そちらの方もあたってみてください。



(当館所蔵 請求記号 WL102)